みんぱく 私の逸品

セネガルのガラス絵
――歴史と生活の記憶

民博 民族社会研究部 三島禎子（みしまていこ）

地域 セネガル共和国
収集年 2000年

みんぱく所蔵のガラス絵と名が付くものは三六二点、そのうち二二三点がセネガルで収集されたものである。そのほかに、ガラスイコンと分類されるものが一九八点ある。これらは東方正教の教会で用いられる、敬拝の対象としてのイコン（聖像画）をガラスに描いたものだが、アフリカにおけるガラス絵の変遷に深くかかわっている。

世界におけるガラス絵はガラス技術の向上とともに、一六世紀以後発展し、一八世紀から一九世紀にかけてボヘミアで大発展を遂げたといわれる。その後、オーストリア、ドイツ、フランスへ普及するとともに、ポーランドやルーマニア、旧ユーゴスラビアなどの東欧地域へも広まった。アフリカへは地中海地域から北アフリカのイスラーム世界へ伝わり、その後一九世紀後半にかけてサハラ砂漠を移動する人やものとともに西アフリカ地域へ渡って来たと考えられる。

セネガルに残存する初期のガラス絵にはキリスト教のモチーフを描いたイコンがあるが、しだいにイスラームや家族をテーマとする絵が主流になった。特に家族の肖像は、写真が一般的ではなかった時代、家の装飾品としても好まれた。植民地時代末期には、フランス人の個人収集家たちが競ってガラス絵を買い求めるようになった。その後、欧米における展示会などをとおしガラス絵は土産物としても発展し、絵のテーマは宗教だけでなく、おとぎ話や歴史、道徳、生活の場面、アフリカを象徴するものなど多岐にわたるようになった。

ガラス絵には古い形式を保っている東欧のイコンに共通する手法が見られる。たとえば、写実性を排した様式では、手や頭、目や首などが通常よりも大きく描かれたり、濃淡のない原色の色使いなどが特徴である。また、一定の構図と形式に則って、同じモチーフが繰り返し描かれる点も共通する。しかし、ガラス絵が宗教的なものから世俗的なものへ、そして商品へと変わってゆくにつれて、手法やテーマも変化してきた。その移り変わりを見ると、人びとが残しておきたいと願う時代の記憶というようなものがテーマに選ばれているように感じる。

フォファナ作。今日も生き続ける伝統楽器奏者たちを、イコンとは異なる線型的な手法で描いた作品　H0222758

ゴラ・ンベング作。セネガルのガラス絵の草分け的作家。肖像写真がガラス絵に描かれた典型的な作風で、イコンに似た手法がよくあらわれている　H0222898

メッツォ作。村のコーラン学校の様子。印象派的な点描画でガラス絵の新しい作風を生み出した作品　H0222838

モール・ゲイ作。ンベングの伝統を受け継いで初期の手法で定番のモチーフを描く作家。奴隷貿易の記憶を描いたゴレ島に残る「奴隷の家」　H0222580